# 島津又七と名越左源太について

2021/1/28

# 一川上久良絵図と名越左源太絵図の考察一

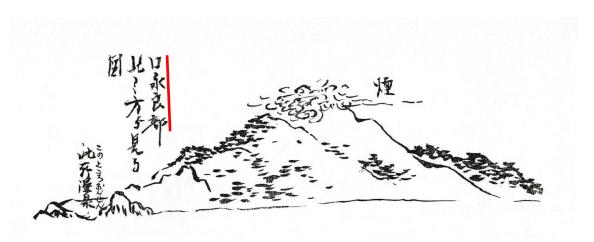
野元新市

#### 序説

永吉島津家領主島津又七は、名越左源太盛貞時敏(又七の姉タネさんの夫)は義兄弟である。名越左源太は、俗にいう「高崎くずれ」の首謀者近藤隆左衛門、山田清安、高崎五郎右衛門らに密談場所を提供した罪により流罪となる。奄美大島へ遠島になる海道中に口永良部島に天候不良の為に18日間滞在し、島の様子を書き残しているので、嘉永3年(1850年)口永良部島がどのような様子だったかを見る、又口永良部湾内の部落の様子を3つの図を基に考察する。そして島津又七と名越左源太はどのような関係があったのかを検証する。

## 第1章 名越左源太絵図とは(嘉永3年)2

まず名越左源太の道程を簡単に紹介しながら口永良部島の図が、いつ・どのような状態で書かれたか。嘉永3年(1850年)4月10日口永良部島湾到着、下図①は船より口永良部島を南に向かって右に見た図であり、岳の煙が上がっている



図① 口永良部港へ向かう船中より右側に見た図3

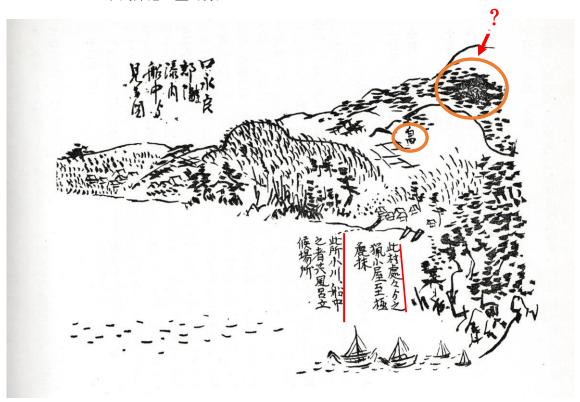
が横広がりで南方から吹いているのだろうか、又左には温泉と書かれているが、上陸する 前から温泉が解ったのか、それとも既に知っていたのか、知っていたのだろう。島の右側 と岳の左側には、木が生い茂っていてその下の方は原野なのだろう。

<sup>1 「</sup>近代日本を拓いた薩摩の二十傑」 P 197

<sup>2 「</sup>日本庶民生活史料集成 第二十巻」のことである

<sup>3 「</sup>日本庶民生活史料集成 第二十巻 P436

4月12日 北東風 朝六ツ 口永良部港出帆 東風に成り、引返す 中程に南風に成り 口永良部港へ昼時分入



図② 海 (港入口) より見て右側 - 向江浜側4 -



4 「日本庶民生活史料集成 第二十巻」 P 438

4月13日 今日も順風相待滯船 昼過港内猟小屋で、風呂立候、陸へ上がる。島の様子 が記入されている。内容は本文を記載する。図と一緒に考察。

4月14日 晴 滞船 (ここに図②③がある)

上記図②③と合わせて、名越左源太の島の情景は、「風呂に入り、山にて竹之子共欠候、諸方より木屋掛にて鰹釣りに参居候、木屋には弐拾家部(株)も有之候、向之方へは弐丁隔て一村有り、地の者にて、家を作り、比処は致遠慮、不差越候、木竹・作地面積多き場所、皆一統鰹釣にて、家に節、塩から、せんじ、それは々過分之者に而、居住も同断、地之者共は百家部(株)迄は無之由に候、女は年之寄も眉毛有、歯黒致、言葉は、桜島言葉に近いが音声が違う、桜島言葉より少し聞得兼候」

図②を見ると、「口永良部島湊内船中より見た図 猟小屋至極麁抹 比処小川船中之者共風呂立候場所 畠」と書かれている。図左側に民家(猟小屋6ケ)があり、右側にも6戸の家があり、少し手前に1戸ある。畠の右上には建物らしきものがあるが解らない。猟小屋の前には船着き場が2つある。図②の右側は山林らしき、図の左側は原野らしきである。次に図③を見ると、右に集落が一つ見え9戸ある。中央付近に比家代官、比家代〇〇〇役所とある。港入口 船1隻」と書かれている。図奥の左側の山は切り立った崖のようでもあり、手前には突き出た岩があり海辺まで木が生えていて船置き場停泊場の様である。

4月15日 晴天 沖はえ風 今日も同断潮掛 琉球下り・三島下り日和角力として、船 中之者共陸へ、拙者には留主番にて候事

4月16日 同天同風

柳盛丸・明恵丸・金山丸 一昨日同港へ汐掛いたし、都合13隻汐掛いたし 候事

- 4月17日 晴天 沖はえ風 同断 汐掛
- 4月18日 晴天 辰巳之風 同断
- 4月19日 同天 同風
- 4月20日 同天 沖はへ風 今日暫陸へ上り、風呂入ともいたし候

4月21日 半天 沖はへ風 南西風 同断汐掛 九ツ時分、雨少し降候

- 4月22日 沖はへ風 同断汐掛
- 4月23日 末申之風 同断汐掛 今日八ツ時分より夜明方迄雨降り、七ツ時より申酉の風に相成候
- 4月24日 雨 西風

今日暮時分より晴上り、今晩泙、同断汐掛

- 4月25日 半天 はへ風 同所汐掛、為請願今夜歌一首詠
- 4月26日 間々小雨 沖はへ風

今日も同断汐掛、七ツ時分に沖はへ風強く吹出、暮時分より西風と相成候

4月27日 朝小雨 終日雲天、西風 今日も終日汐掛

4月28日 雨天 西風 巳之刻比より戌亥の風、午刻過戌亥より北風に相成侯(陽六月 八日)今日戌亥風に相成船中勢ひ立、午之刻時分、拾三隻之汐掛船 竹崎岬 之方へ巻上り出帆、間もなく北風に相成、追手にて順風宜く、暮時分悪石近 く相成、今晩も終夜追手、帆八合持候



図④ 口永良部港の出口(大島へ向かう船中より)5

図④は、口永良部島湊出口から見た図で、港を出て南の方から口永良部島湊を見ている。 奥に山が2つ、尾根が一つ、手前に岩礁のような大きな岩、右奥に民家が3戸見え、距離 的には大きく書かれている様である6。代官役所だろうか。それとも密貿易の拠点だろうか。 密貿易拠点については後で記載する。

図①②③④は、非常に繊細である。森林や原野の区別がある。民家の戸数が解かる。と 同時に集落ごとになっているのではないか。代官所がある。川がある等当時の生活が解る ものである。

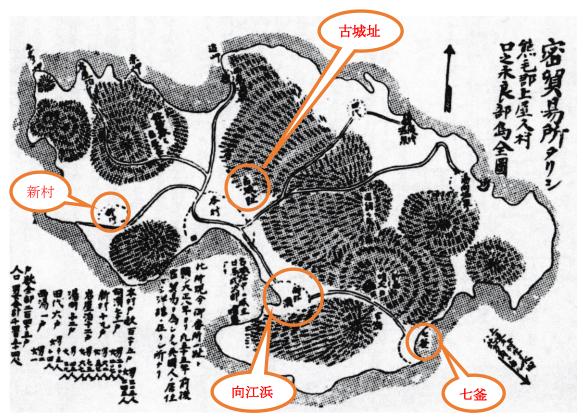
#### 第2章 川上久良絵図とは(大正8年)7

大正8年9月15日に、鹿児島士族川上久良が口永良部島に渡り、向江浜に住んでいた 薩摩の密貿易船水夫であった喜入村の鈴四郎助屋島の古老から聞き取り書いた図で、大正

<sup>5 「</sup>日本庶民生活史料集成 第二十巻」図③はP439、図④は、P439

<sup>6</sup> 図④の印象である。

<sup>7 「</sup>南国史話」.川島元次郎の川上久良図である P345



村口永良部島全図」である。

図5-① 川上久良による図「密貿易所タリシロ永良部島」8

口永良部島全体の図は、俯瞰図である。

明治22年4月1日(1889年) 町村制施行により馭謨郡上屋久村が成立し「護謨郡口永良部島」となり、明治29年3月29日(1896年)には、熊毛郡の所属となり「熊毛郡上屋久村口永良部島」となる。図には大正8年9月18日とあり熊毛郡上屋久村口永良部島とある。9

まず記載内容から見る。10

本村125戸男315人女345人向濱71戸男200人女207人新村19戸男62人女37人(67人)岩屋泊12戸男75人女67人湯向12戸男45人女39人

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E5%B1%8B%E4%B9%85%E7%94%BA より貼付

<sup>8</sup> 川上久良図は、川上元次郎の「南国史話」より抜粋し拡大する。

<sup>9</sup> ウイキペディアより

<sup>10</sup> 地図上より抜き出した

 田代
 6戸
 男15人
 女14人

 西湯
 1戸
 男2人
 女1人

 合計
 246戸
 男714人
 女710人

 記載
 (245戸)
 (1454人)
 実際(1424人)

- ・古城址ニ古城主 日高成次郎 ○○
- ・比所現今御番所ノ址ヲ○○大正八年ョリ丸五十三年前後 密貿易ヲ○シタル英国人ノ住 居セシ洋館ニ○ラン所タリ
- ・本村 向江濱 七釜 古岳 新岳噴火 湯向温泉 ○﨑温泉 田代 追﨑 西湯温泉 赤崎 岩屋泊 ○○○岬 新村 (新村の上の山に文字○○○く○○○)(古城址と湯向 温泉の間の山の上に○○○○)(向江濱と七釜の間の山裾に○○)

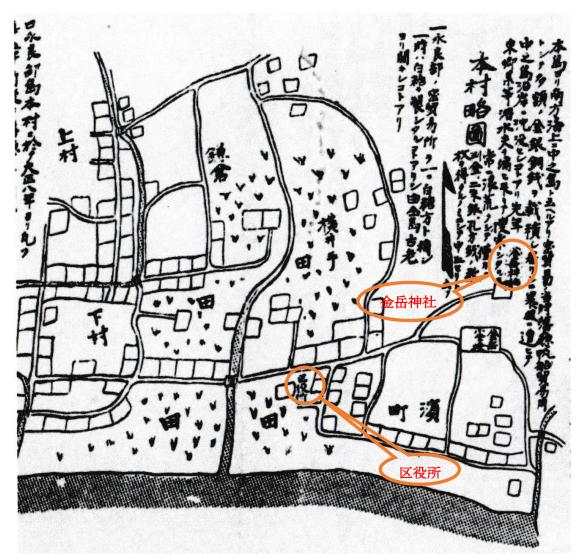


図5-② 川上久良による図「密貿易所タリシロ永良部島」

・本島ヨリ南方の海上ニ中之島ト〇ヘルタル密貿易ノ当時薩藩帆船貿易所トシテ多額ノ金銀 銅銭ヲ載積居リン〇暴風に遭ヒテ 中之島沿岸ニ沈没セレコトアリ光年 東郷集筆潜

水夫ノ○ヲ○リテ捜索シタル

- ・本村略図 常二〇荒クシテ儃々二 〇金、二朱銀、孔方銭ノ数枚ヲエタル〇〇シテ中〇 〇リト〇リ
- ・永良部ノ密貿易所ヲ一ツ 白糖方ト○シ 一時ハ白糖ノ製シタルコトアリシ由全島古老ョリ聞キレコトアリ
- ・金岳神社 金岳小学校 濱町(25戸) 横井手(22戸) 鎌倉(23戸) 上村(19戸) 下村(21戸) 岩崎(一部14戸)その他田 密貿易所
- · 図中央下**区役**

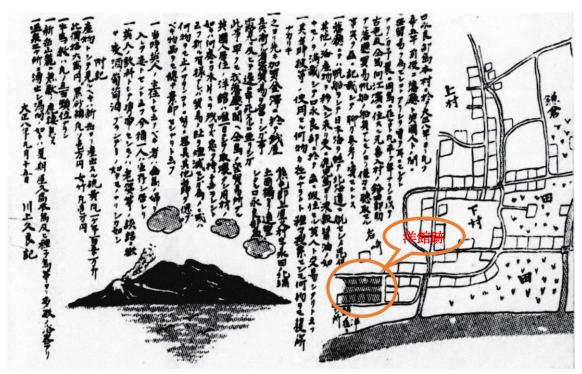


図5-③ 川上久良による図「密貿易所タリシロ永良部島」11

- ・岩崎 洋館在リシ所
- ・口永良部島本島ニ於イテ大正八年ヨリ○リ 五十五年前後ニ薩摩と英国人トノ間ニ密貿易ヲ為セレコトアリシタ○○耳ニセシタトアリシカ予○ニ岡島ニ○○ト○○ア○アリシヲ以テ古老風全島向江濱ニ住スル元喜入村ノ鈴四郎助ナル薩摩密貿易帆船ノ船員アルモノヨリ○刀ニ○取マル事実ヲ○ニ記載シテ○カ表○考ニ資セシトス
- ・其当時彼等ノ使用セル何物カ在ルナラシト種々授○○シモ襲○ナカリキ
- ・之ヨリ先キ加賀金澤ニ於テ銭屋五兵衛ナル○密貿易ヲ○ミシガ事露見ニ及ヒテ○○死ス

<sup>11 「</sup>南国史話」川上元次郎の川上久良図の密貿易所址図の拡大と文字

ルニ○リシガ 其事○クモ我藩ニ聞へ全島ノ密貿易所タル英国人居住ノ洋館ハ唯一日ニシテ取壊タレ用材ノ如キハ○○ニカ木片スラ残サズ○ク○○ラレシト○フ斯ル加様アレバ貿易ノ址ヲ○滅センダ島ノニ或ハ何物ヲモ止メサランコトニ努○器具其他当時ノ偲ブベキ物品ヲモ○テ景○セシヤリト言ウ

- ・当時英国人ノ主任トモ〇〇ベキ者ハ全島ノ帰リ入リテ妾トセント〇〇ヲ今猫一人ハ〇存 シ〇レリ
- ・英人ノ飲料トシテ〇〇〇セシモノハ老婆等ノ〇〇〇〇テ麦酒 葡萄酒 ブランデーノ如 キモノ〇リシカ如シ

#### 付記

- ・産物トシテ見ルヘキハ新岳ヨリ産出スル硫黄〇一ケ年百〇万〇其〇〇六萬円 黒砂糖〇 〇壱万円 女竹〇壱萬円
- ・牛馬数ハ丸ノ五百頭位デラシ
- ・新岳山麓ニ無数ノ鹿棲息ス
- ・温泉四カ所ニ湯出シ湯向ノ如クハ夏期屋久島本島及ヒ種子島等ヨリ多数ノ浴客アリ
- ・最後に遠望図が文字の下にあり、「熊毛郡上屋久村〇〇永田北〇土面橋ヨリ遠望シタルロ 永良部島」とある

大正八年九月十五日 川上久良記12

## 第3章 明治6年絵図(海軍沿岸実測図)

明治6年海軍が沿岸実測をして狩野慶信製とある。非常に精密に計測されたものであろう。湾内の水深が記載されていて航行時の停泊等に利用するものであろう、薩摩藩の良港であった事を承知していたからであろうか。

そこで、図⑥が口永良部島の当時が解る。全体の戸数が、66戸描かれている。13

向江濱 9戸

濱町 10戸、7戸、4戸

鎌倉 7戸

上村 9戸

下村 4戸

岩崎 15戸、海岸寄1戸

合計 66戸

図上に遠望のものがあり、船が一隻(帆が非常に高い)描かれている。

港門 北二分 一東

<sup>12 ○</sup>は資料より判別できない字であること (詳細は「南国史話」川上元次郎を拝読)

<sup>13</sup> 図⑥より勘定した



図⑥ 明治6年絵図(海軍沿岸実測図)

### 第4章 密貿易の拠点は何処だ

図①②③より其々疑問点を列挙していく、又記載事項と合致する事を列挙する。まず始めに疑問点其の1 名越左源太は殆ど船の中にいたので、住人より聞取調査及び見聞は時間的な制限があった。だから、島の内部の詳細については書かなかったか、それとも隠したかである。密貿易所の事が記載されていない。遠見番所もない。元禄絵図にある本行寺もない。どれか跡かたがなかったのか、又口永良部港に、13 隻の大船が汐掛していた、嘸かし賑やかであったろう事が想像できる。湾内周囲 3,7 9 km、面積 9 1 1,6 9 0  $\text{m}^2$ 、東京ドームの約 2 0 個分の広さである14。其の 2 は、川上久良は、古老聞取調査と見聞であるが、遠望図の左から噴煙がある。名越左源太の図では温泉である。川上久良は温泉の煙が見えたのか。古老の話にも疑問がある。古老の話で銭屋五兵衛が没して一夜にして取り壊

<sup>14</sup> Google マップによる簡易計算である。

したとあるが、名越左源太が口永良部へ行ったのは、嘉永 3 年で、銭屋五兵衛が没したのが、嘉永 5 年獄中死を遂げている。嘉永 3 年には密貿易の洋館はなければならない。遠見に目につかない様にあって洋館などでは無かったのではないかと疑念が残る。又区所と言う場所があるが役所であろうか。其の 3 は、海軍図で、距離がマイルである。明治 6 年に船には日本人だけだったのだろうか、上部遠望図に描かれている帆船の大きさが余りにも

巨大である。(図を拡大)

## 第5章 結論

テーマが、島津又七と名越左源太となっているので、その事を説明する。名越左源太が口永良部島や大島遠島へなった事は、当時の時代背景から原口泉「近代日本を拓いた薩摩の二十傑」15によると、島津斉彬の作戦とでもいうべき外国船の出入りが頻繁であった奄美大島の詳細絵図がほしかったのであって、遠島は口実である。名越左源太はいち早く「黒船三隻を見ている」黒船の来航は一段大なる出来事である。16嘉永6年(1853年)ペリーの浦賀来航の直前、琉球守衛の名目で幕府から大船建造の黙認を得、ついで大船建造禁止令解除後の同年11月には、蒸気船3隻を含む合計15隻の軍艦建造計画を申請している。17



図⑥一① 巨大帆船

そこで、名越左源太が、「夢留」を嘉永 4年 7月より記録しているので、その中に出てくる人物について考察する。「夢留」とは、嘉永 4年 7月(1852年)から翌年 12月 24日 迄の夢を書き留めたものである。一部であるが、164枚にも及ぶ「夢留」が徒然なるままに書き記されたものとも思えない。187月 5日~ 12月 24日迄の 543日間で、

嘉永4年 7月14日 嶋登殿

10月27日 嶋登殿

嘉永5年 4月2日 口永良部島

10月4日 口永良部島

10月24日 島津権五郎殿

11月朔月 登殿

11月10日 嶋津登殿

11月15日 登殿

上記の如く書き記しているのである。19島津登とは、島津又七の父であり、寄合島津登家島

<sup>15 「</sup>近代日本を拓いた薩摩の二十傑」 P195

<sup>16 「</sup>南西諸島史料集 第二巻」 P75

<sup>17 「</sup>南西諸島史料集 第二巻」 P29~30

<sup>18 「</sup>南西諸島史料集 第二巻」 P7~8 「夢留」 P259~331

<sup>19 「</sup>南西諸島史料集 第二巻」 P 262、282、304、321、323、325、327、327

津八郎権五郎登<sup>20</sup>であり、名越左源太に「通趣」を申付した。下記の様島津(八郎権五郎)登 切封

○重留屋敷 ○今和泉屋敷

御役人衆 御役人衆

○島津 登殿 ○倉山作太夫殿 (琉球在番奉行) 21

の名がある。(外にも数人)「夢留」にこれ程登場するのは、島津登と名越左源太が関係深いからである。島津登の長女タネは、名越左源太の妻である。又島津登の息子島津又七の娘冬(フユ)は、倉山作太夫(室島津登久備孫女・永吉家二男家)の息子倉山久昌の息子藤五郎の妻である。<sup>22</sup>藤五郎は西南戦争で戦死した。

#### 第6章 小括

島津又七は、名越左源太とも関係があり、父親の代からの関係で親戚である。そして琉球に関しても知識が豊富であった。島津又七は、口永良部島の情報を持っていた事も解かる。島津又七が、明治維新後大志を抱いて行った口永良部島は、島津又七にとって第二の人生になるべく処であったが思うが儘にならなかった。晩年はどのように過ごしたかは明確ではないが、息子島津久徴が口永良部島に係わった事は確認できた。ここで得たことは、島津又七が、孤島に一所持の身分からどうして移住したのか一端が理解できた。又名越左源太の乗った船は、「前之浜大祥丸」である。<sup>23</sup>とあるので、明治の初め頃口永良部島へ乗っていった島津又七の船も同様なものであっただろうか。

#### 参考文献

- 1. **野田幸敬.** 島津家家臣団系図集 上・下. 出版地不明: 南方社, 2019 年 6 月 1 日.
- 2. 松下志朗. 南西諸島史料集 第二巻. 出版地不明: 南方新社, 2008 年 11 月 20 日.
- 3. 新屋敷幸男. 南海の舟人たち. 2016年1月18日.
- 4. **谷川健一外.** 日本庶民生活史料集成 第二十巻. 出版地不明: 三一書房, 1972 年 7 月 15 日.
- 5. 原口泉. 近代日本を拓いた薩摩の二十傑. 出版地不明: 燦燦舎, 2019 年 11 月 1 日.
- 6. 永井亀彦. 高崎崩の志士名越左源太翁. 昭和9年 12 月 3 日.
- 7. 永井竜彦. 高崎くずれ 大島遠島録. 昭和24年10月5日.
- 8. **友野春久**. 敬天愛人第22号「池上四郎貞固系譜」. 出版地不明: 南郷南洲顕彰会, 平成16年9月24日.

<sup>20 「</sup>島津家家臣団系図集」 P 272

<sup>21 「</sup>島津家家臣団系図集」 P 356

<sup>22 「</sup>島津家家臣団系図集」 P356

<sup>23 「</sup>南西諸島史料集 第二巻 | P131